

## 相談から気付かされる事

伊豆函南病院地域連携室長 三谷美貴子

私は、精神科の医療機関で相談員をしております。日々、様々な方からの相談やお電話を受けております。相談を受けたり、苦情を受けたりする中にはいろいろと考えさせられる事が多くあります。

ある日、電話がかかってきました。以前に治療をされていて現在は直接関わりは無い患者様からです。

現在、様々な支援を受けて暮らしてはいるが自分の思い通りの支援が受けられていない事で、障害者に対する差別だ、電話をしても担当者がいなくて話ができないのは虐待だと話される。

傾聴していると、返事がないのは仕事をしていないと責められる、一見理不尽にも聞こえるが、しばらくすると気がすんだのか自ら電話を切られる。

また、別の日はご家族の方からは、20年前にそちらで付けられた病名のせいで今でも治療が必要だ、本当は違う病気だったのではないのか？その病名のおかげで人生が上手くいかない、責任を取ってもらいたいとお電話いただいたこともあります。

現在の自分にはどうする事も具体的には思い浮かばず、申し訳ないが当時の事をあれこれ言えるわけもなく、戸惑いつつ何とか傾聴に努めた記憶があります。

日常的にあれこれ相談はありますが特に印象に残っているこのエピソードから、何気なく使う言葉や、説明する側にとっては当たり前の事が、受け取る側からすると同じではなく、何年たっても心が傷つけられたという思いは根強く残り、生半可では解消したり、忘れたりとはできないものだと感じます。このお二人は答えを求めたのか、言わずにはいられない思いをぶつただけなのか、それとも誰かと繋がっていたかったのかなど、本心は伺い知れません。しかし、何らか訴えたかったのだと今にして思います。

社会は人と人が何らかの形で繋がっており、その中で協力・共感・いたわり・悲しみ・喜び・誤解・嫉妬・憎しみと様々な感情がぶつかり合って生活している、お互いにどこかで知らずに人を傷つけたり、傷つけられていたりしているのではないのでしょうか。

改めて 差別ってなに？ 人権を守るってどういうこと？ と考えてしまいます。

正解は一つの形ではなく、とても流動的なものなのかもしれません。

私は、できるだけ相手とコミュニケーションを図る事が、行き違いを少なくしていける一つの手段だと思っています、気持ちがあはつとする時は、「ありがとう」「たずかる」「何か手伝う？」「かわいい」と言う言葉と、何気ない笑みがいつもあるように思います。

生きづらいと感じている多くの人はいるとは思いますが、時には日常の些細な事でも言葉に出して直接相手に感謝や思いを伝える事から試してみると、少し気持ちに変化が生まれるのではないのでしょうか。自身の気持ちに余裕が持てると様々な物事に対する見方が変わってくるのではないかと思います。